

「道徳教育」研究の社会学的考察：
—大学教職課程教科書及び小学校検定教科書の比較研究—

Analysis of Morality Education Textbooks Based on Sociological Perspective: Focusing
University Teaching Course Materials and Authorized Elementary School Textbooks

末澤 奈付子 (神戸大学 大学院国際協力研究科 研究員)

山内 乾史 (神戸大学 大学教育推進機構 教授)

要旨

道徳教育は活動から教科となった。本稿が意図するのは教職課程で道徳教育について何がどう教えられているのか、また小学校の道徳で教科書がどのように構成されているのかを分析することである。まず、大学教職課程で使用される教科書 14 冊を歴史的視点から論述する。次に、実際の小学校で使用されている教科書を 2 冊比較検討する。教科書の選定においては、採択率の大きく異なる 2 種類の小学校教科書(東京書籍 21.3%と学校図書 2.4%)を数量的に、登場人物の国籍及びジェンダーの視点から比較する。結論としては、採択率の多い、東京書籍の方が登場人物における男女比の差は少なく、採択率の少ない学校図書の方が、日本人以外の外国人の比率が多く示された。教育的意義を持つ題材の集合体が教科書であり、国籍やジェンダーに対する題材の配慮は十分になされているにも関わらず、一定の数量の教科書を一つのテキストとして分析対象とすることで、出版社や編集者の意識しない差が、非意識のバイアスとして表出された。

1. 本研究の目的

2018 年度よりすべての小学校で、2019 年度よりすべての中学校で「特別の教科 道徳」が教えられるようになった。まだ始まったばかりの段階ではあるが、いったいどのような教科書で何がどのように教えられているのか、従前の「教科外活動」としての「道徳の時間」から何がどう変わったのか、これらに関して検討するのが本稿の目的である。

まず、「特別の教科」となることにより検定教科書が導入された。小学校では 8 社、中学校でも 8 社が教科書を刊行している。小学校では光文書院、中学校では日本教科書を除く 7 社が小学校でも中学校でも道徳教科書を刊行している。

ちなみに小学校では採択率順に (1) 東京書籍、日本文教出版 21.3%、(3) 光村図書出版 17.1%、(4) 学研教育みらい 14.8%、(5) 教育出版 8.6%、(6) 光文書院 8.4%、(7) 学校図書 5.7%、(8) 廣済堂あかつき 2.9%である。

他方、中学校では(1)東京書籍 34.8%、(2)日本文教出版 25.3%、(3)光村図書出版 16.0%、(4)教育出版 10.1%、(5)学研教育みらい 5.7%、(6)廣済堂あかつき 5.4%、(7)学校図書 2.4%、(8)日本教科書 0.3%である。

2. 大学教職課程「道德教育の研究(道德教育論)」の教科書分析

ここでは1970年代後半から2020年までの半世紀近くの間発行されてきた数々の大学教職課程における「道德教育の研究(道德教育論)」の教科書の構成を分析してみる。私服の都合もあり、ここでは特に11冊を取り上げる。またそれとは別に放送大学の教材について、学士課程のもの2冊、大学院課程のもの1冊を取り上げる。

各書の構成を確認することと社会学的な視点が盛り込まれているのかどうかに着目した。まさしくデュルケム(2010)が喝破したように、社会があるからこそ道德が存在するのであり、「社会には道德教育が必要になる」のである。したがって、**道德は社会学的分析が可能であり、また社会学的分析を必要とするのである。**

なお、ここでの分析手法に関しては麻生ゼミ(1981)を参考にした。

(1) 新堀通也編『道德教育(講座現代教育学9)』(福村出版、1977年3月)

- 第1章 道德教育の本質 長井和雄
- 第2章 道德性の発達 池田秀男
- 第3章 欧米における道德教育思想 小笠原道雄
- 第4章 欧米における道德教育思想 上野武
- 第5章 日本における道德教育の歴史Ⅰ 井上久雄
- 第6章 日本における道德教育の歴史Ⅱ 三好信浩
- 第7章 世界の道德教育の類型 沖原豊
- 第8章 各国の道德教育 二宮皓
- 第9章 道德教育の場面Ⅰ—家庭 村井道明
- 第10章 道德教育の場面Ⅱ—学校 上寺久雄
- 第11章 道德教育の場面Ⅲ—社会 村田昇
- 第12章 教師にとっての道德教育 新堀通也

まず取り上げるのは、日本の教育社会学の礎を築いた一人、新堀通也の編集によるものである。ちなみに、新堀はデュルケム研究でも知られる教育社会学者である。1966年には単著『デュルケム研究—その社会学と教育学—』(文化評論出版株式会社)を刊行し、その第二章第二節において「道德と教育」を論じている。

教育を研究対象とする分野に身を置く者からすれば、上記のほとんどは広島大学関係者であり、各領域の著名なフロンランナーが執筆していることが分かるだろう。新堀、池

田、井上、三好、沖原、二宮の6名は広島大学教育学部（現在は教育学研究科）の教員であり、長井は東京学芸大学、小笠原は上智大学、上野は西南学院大学、村井は徳島大学、上寺は筑波大学、村田は滋賀大学に、それぞれ当時勤務しており、いずれも著名な研究者である。予想できることながら、池田秀男（社会教育学）、新堀通也（教育社会学）の執筆した章ではデュルケムに言及されており、教育社会的な視点が入り入れられている。本書が類書と大きく異なる点は、比較教育的な視点から道德教育を類型化し、検討しているところであろう。

(2) 田中圭次郎編『道德教育の基礎（佛教大学教育学叢書）』（ナカニシヤ出版、2006年3月）

- 第1章 道德と教育 田中圭次郎
- 第2章 西洋における道德教育思想（I）—古代・中世の道德教育思想— 中井裕之
- 第3章 西洋における道德教育思想（II）—ルネサンス・17世紀の道德教育思想— 中井裕之
- 第4章 西洋における道德教育思想（III） 田中潤一
- 第5章 日本における道德教育の思想 田中潤一
- 第6章 日本の道德教育（I）—第2次世界大戦以前— 田中圭次郎
- 第7章 日本の道德教育（II）—第2次世界大戦以後— 田中圭次郎
- 第8章 「生きる力」の育成と道德教育 山崎高哉
- 第9章 小学校・中学校における道德の時間 達富洋二・小林隆
- 第10章 進路・職業指導と道德教育 伊藤一雄

編者の田中圭次郎は比較教育学者であり、執筆当時佛教大学教育学部教授であった。ちなみに、執筆当時、中井裕之と田中潤一は京都大学大学院教育学研究科の大学院生、山崎、達富・小林はいずれも佛教大学教育学部教員、伊藤は関西福祉科学大学教員であった。佛教大学は通信教育課程をも有する教員養成の伝統校であるのだが、構成としては極めてオーソドックスな教科書である。ただし、教育哲学と比較教育学の視点が強く出ており、社会的な視点はほとんどなく、デュルケムの引用も名前も出てくることはない。

(3) 小島弘道監修、吉田武男・相澤伸幸・柳沼良太『学校教育と道德教育の創造（講座 現代学校教育の高度化 第23巻）』（学文社、2010年11月）

- 第1章 道德教育における始原への遡及 相澤伸幸
- 第2章 新旧の道德授業の理論と実践 柳沼良太
- 第3章 「心の教育」からの脱却とわが国の道德教育の再構築 （吉田武男）

本書は特異な構成をとる。3名の著者（編者ではない）がそれぞれ一つの章を担当し、3章構成となっている。もちろん道徳教育の歴史（西欧、日本の双方）、教科教育法、シティズンシップ等のトピックを漏れなく取り上げ、内容的にはオーソドックスともいえる。執筆者3名は教育哲学の領域の研究者である。なお、デュルケム等社会学者の名前は出てこない。

(4) 田中智志・橋本美保監修、松下良平編『道徳教育論（新・教職課程シリーズ）』（一藝社、2014年4月）

- 序章 なぜ学校で道徳教育を行うのか 松下良平
- 第1章 学校における道徳教育の歴史～戦前編～ 徳本達夫
- 第2章 学校における道徳教育の歴史～戦後編～ 佐久間裕之
- 第3章 子どもと悪 森佳子
- 第4章 ジェンダーと道徳・教育 林泰成
- 第5章 情報社会の中の道徳教育 上原秀一
- 第6章 消費社会・市場社会の中の道徳教育 生澤繁樹
- 第7章 グローバル化の中の道徳教育 市川秀之
- 第8章 「道徳の時間」で何ができるか～小学校編～ 林泰成
- 第9章 「道徳の時間」で何ができるか～中学校編～ 柳沼良太
- 第10章 教科教育と道徳教育 梶原郁郎
- 第11章 特別活動と道徳教育 松岡敬興
- 第12章 学校全体で行う道徳教育 田中智志
- 第13章 道徳教育と市民教育 生澤繁樹
- 終章 これからの道徳教育を構想する 松下良平

次いで取り上げるのは、道徳教育研究の第一人者、松下良平の編集した書である。本書の執筆者は所属の面では多岐にわたるが、専門領域で言えば、教育哲学、教育史学、道徳教育学の領域に属する者が過半である。ジェンダー、情報社会、市民教育など、21世紀の新たな課題と道徳教育との関連を扱うなど意欲的な書である。13章ではデュルケムに言及されている。

(5) 小寺正一・藤永芳純編『道徳教育を学ぶ人のために（四訂）』（世界思想社、2016年9月）

- 第1章 道徳と教育 小寺正一
- 第2章 道徳教育の歴史 小寺正一
- 第3章 道徳性の発達 藤永芳純

- 第4章 道德教育の授業理論 伊藤啓一
- 第5章 学校における道德教育の全体構想 西村日出男
- 第6章 道德科の指導 小寺正一
- 第7章 道德的実践の指導 藤永芳純

本書は他書と比べて章の数が少ないと感じられるかもしれないが、一つ一つの章の分量が多く、全体として、量的には全く遜色はない。全7章を4名で執筆している。4名とも道德教育の専門家であり、道德教育の理論、歴史、心理学的な側面、授業実践を巧みに網羅している。デュルケムについてはコールバーグとの関連でわずかに言及されている。

(6) 高見茂・田中耕治・矢野智司・稲垣恭子監修、田中耕治編著『道德教育（教職教養講座第6巻）』（協同出版、2017年10月）

- 第1章 道德の思想と道德教育 松下良平・山名淳
- 第2章 道德教育の可能性 菱刈晃夫・鳶野克己
- 第3章 道德教育の歴史 岸本実・高根雅啓
- 第4章 道德教育をめぐる今日的課題 柴原弘志・松下良平
- 第5章 発達に応じた道德教育の展開と課題 榎沢実・堀田泰永・鎌田賢二・野本玲子
- 第6章 道德教育の教育方法 荒木寿友・田中耕治
- 第7章 道德教育における教師の役割 荒木寿友

本書は、京都大学大学院教育学研究科の教員が中心になって編纂した「教職教養講座」の一冊である。理論的なパートについては教育哲学、実践のパートについては現職教員が中心になって執筆している。デュルケムへの言及はない。

(7) 吉田武男監修、田中マリア編『道德教育（MINERVA はじめて学ぶ教職12）』（ミネルヴァ書房、2018年5月）

- 第I部 道德教育の基礎と理論
 - 第1章 道德とは何か 吉田誠
 - 第2章 道德教育の諸理論（西洋） 小林将太
- 第II部 日本における道德教育の歴史
 - 第3章 修身化時代の道德教育 宮本慧
 - 第4章 全面主義的道德から特設道德へ 河原芽以
 - 第5章 「道德の時間」から「特別の教科 道德」へ 細戸一佳
- 第III部 教科化時代の道德教育
 - 第6章 指導体制と担当者 板橋雅則

第7章 道德教育用教材 原口友輝

第8章 道德教育における評価 吉田武男

第IV部 新たな時代の道德教育

第9章 道德教育における環境教育 山本容子

第10章 道德教育における情報モラル教育 村松遼太

第11章 道德教育における現代的な課題の取扱い—国際的な人権教育から— 細戸一佳

第V部 価値教育をめぐる諸外国の動向

1. アメリカ 村松香織

2. イギリス 菊地かおり

3. ドイツ 相賀由美子

4. フランス 川上若奈

5. スイス連邦 田中マリア

6. 韓国 洪顕吉

7. 中国 那楽

8. シンガポール 池田充裕

9. タイ 渋谷恵

10. マレーシア 手嶋將博

大判の書籍で、執筆者の所属先は多岐にわたる。現職教員も大学院生も含まれている。編者の田中は道德教育研究の専門家である。理論、歴史、実践を丁寧に抑えているが、第IV部と第V部が本書の特徴であろう。第IV部では21世紀の現代的な諸課題と道德教育の関係性を説き、第V部では10か国の動向が詳細にレポートされている。第2章においては、デュルケム『道德教育論』への言及が再三みられる。

(8) 原清治・春日井敏之・篠原正典・森田英樹監修、荒木寿友・藤井基貴編『道德教育(新しい教職教育講座 教職教育編7)』(ミネルヴァ書房、2019年5月)

第1章 道德教育とは何か 生澤繁樹

第2章 道德教育と心理学 藤澤文

第3章 道德教育の歴史 山崎雄介

第4章 学習指導要領における道德教育 小林将太

第5章 道德教育の方法 伊藤博美

第6章 道德教育における内容項目と教材 荒木寿友

第7章 学習指導案の作成—小学校 藤井基貴・松原祐記子・木原一彰

第8章 学習指導案の作成—中学校 西田透・土屋陽介・星美由紀

- 第9章 道徳科における評価 趙卿我
- 第10章 道徳教育と子どもの問題 加藤弘通
- 第11章 シティズンシップ教育と道徳教育 川中大輔
- 第12章 現代的な課題と道徳教育 藤井基貴
- 第13章 対話への道徳教育 荒木寿友

「新しい教職教育講座」は佛教大学と立命館大学の教職課程担当教員が中心になって企画したシリーズであるが、この間に関しては立命館大学の教員が中心になっており、佛教大学の関係者は執筆していない。本書では実践にかなりのスペースが割かれているが、現代的な課題も取り上げている。デュルケムへの言及は第1章にあり、「意志の自律性」の重要性が説かれている。

(9) 伊藤良高・富江英俊・大津尚志・永野典詞・富田晴生編『道徳教育のフロンティア (改訂版)』(晃洋書房、2019年4月、初版は2014年9月)

- 第1章 人間形成と道徳—価値観多様化時代の「人格の完成」論— 伊藤良高
- 第2章 道徳教育の基礎理論—哲学的・教育学的・心理学的な側面から— 富江英俊
- 第3章 道徳教育の歴史①—戦前の日本— 小針誠
- 第4章 道徳教育の歴史②—戦後の日本— 大津尚志
- 第5章 道徳教育と教育課程 白銀夏樹
- 第6章 道徳教育の授業の指導法 富田晴生
- 第7章 道徳科の教材・評価 東風安生
- 第8章 道徳教育の学級経営・生徒指導 大堂晃嗣
- 第9章 家庭・地域における道徳教育 香崎智郁代
- 第10章 保育所・幼稚園等保育施設における道徳教育 永野典詞
- 第11章 道徳教育と宗教教育 森一郎
- 第12章 世界の道徳教育 苫野一徳・柴田賢一・大津尚志・立花有希・胡倩卓

以上の他にコラム等を橋本一雄・中川雅道・降旗直子・宮崎由紀子・金子幸・桐原誠が執筆している。執筆者の所属は多岐にわたるが、構成は極めてオーソドックスである。執筆者のうち、富江と小針が教育社会学者である。第2章(富江執筆)ではデュルケムへの言及がある。

(10) 井ノ口淳三編『道徳教育(教師教育テキストシリーズ11、改訂第二版)』(学文社、2020年4月、初版は2007年4月)

- 第1章 現代社会と道徳 井ノ口淳三
- 第2章 道徳教育の本質と目標 宮嶋秀光

- 第3章 道徳性の発達理論とその臨界—フロイト、ピアジェ、コールバーグ— 下司晶
- 第4章 道徳教育はどうあるべきか 徳永正直
- 第5章 道徳教育の方法 広瀬信
- 第6章 道徳科の授業 山崎雄介
- 第7章 道徳教育の歴史 徳本達夫
- 第8章 道徳教育と宗教 山口和孝

執筆者の所属は多岐にわたるが、構成は極めてオーソドックスである。ただ、全体として心理学的な視点が強いものの、デュルケム『道徳教育論』に関する説明もある。

(11) 汐見稔幸・奈須正裕監修、上地完治編『道徳教育の理論と実践（アクティベート教育学09）』（ミネルヴァ書房、2020年4月）

- 序章 道徳科の授業を学びの場に 上地完治
- 第1章 わが国の道徳教育の歴史 毛内嘉成
- 第2章 学習指導要領における道徳教育と道徳科の規定 小林万里子
- 第3章 子どもの道徳性の発達 岩立京子
- 第4章 道徳学習指導案の作成例（1） 坂本哲彦
- 第5章 道徳学習指導案の作成例（2） 櫻井宏尚
- 第6章 道徳学習指導案の作成例（3） 桃崎剛寿
- 第7章 道徳科の教材分析、教材研究 堺正之
- 第8章 読み物資料の役割 古波蔵香
- 第9章 役割演技の意義と活用法 早川裕隆・北川沙織
- 第10章 道徳授業の評価 服部敬一
- 第11章 道徳授業と学級経営 眞榮城善之介・上地豪
- 第12章 学校の教育活動全体を通じた道徳教育の展開 天願直光
- 第13章 道徳とは何か 藤井佳世
- 第14章 道徳的価値について 岡部美香
- 第15章 いじめ問題と道徳教育 渡邊満

心理学者と道徳教育の専門家、現職教員を中心として執筆された教科書である。いじめ問題に一つの章を割いているのが特徴的である。デュルケムへの言及はない。

次に放送大学教材を概観する。

(A) 林泰成『新訂 道徳教育論』（財団法人 放送大学教育振興会、2009年3月）

- 第1章 道徳教育とは何か
- 第2章 日本の道徳教育の歴史

- 第3章 学習指導要領と道德教育
- 第4章 道德性の発達
- 第5章 道德的社会化
- 第6章 道德授業の方法I—伝統主義的アプローチ—
- 第7章 道德授業の方法II—進歩主義的アプローチ—
- 第8章 教科教育と道德教育
- 第9章 特別活動と道德教育
- 第10章 道德教育と教育臨床
- 第11章 家庭・地域社会における道德教育
- 第12章 諸外国の道德教育
- 第13章 道德教育と宗教
- 第14章 人権教育と道德教育
- 第15章 道德教育の課題

本書は林の単著である。著者は道德教育研究の専門家である。したがって構成もオーソドックスである。デュルケムについても詳細な論述がなされている。

(B) 堺正之『道德教育の方法』（一般財団法人 放送大学教育振興会、2015年3月）

- 第1章 道德と道德教育
- 第2章 日本における道德教育の歩み
- 第3章 シティズンシップ教育の要請
- 第4章 子どもの発達と道德教育（1）—社会化論—
- 第5章 子どもの発達と道德教育（2）—道德性発達論—
- 第6章 学校における道德教育（1）—教育課程上の位置づけとその目標—
- 第7章 学校における道德教育（2）—道德の内容—
- 第8章 学校における道德教育（3）—道德の指導計画—
- 第9章 道德授業の実践（1）—道德の時間の意義—
- 第10章 道德授業の実践（2）—道德の時間の指導過程・指導方法—
- 第11章 道德授業の実践（3）—新たな指導法の開発—
- 第12章 道德教育における評価
- 第13章 道德教育における家庭・学校・地域社会の連携
- 第14章 外国における道德教育
- 第15章 道德教育の課題—人権と道德、道德教育の妥当性—

本書も堺の単著である。著者は道德教育研究の専門家である。したがって構成もオーソドックスである。(A)同様に、デュルケムについても詳細な論述がなされている。

(C) 西野真由美編『新訂 理念と実践』(一般財団法人 放送大学教育振興会、2020年3月)

- 第1章 道德教育への問い 西野真由美
- 第2章 学びと道德教育 西野真由美
- 第3章 道德教育理論の展開 西野真由美
- 第4章 道德感情の発達と行動理論に基づく道德教育 渡辺弥生
- 第5章 道德教育理論の現在 西野真由美
- 第6章 世界の道德教育 西野真由美
- 第7章 道德教育をめぐる論争—戦前— 西野真由美
- 第8章 道德教育をめぐる論争—戦後— 貝塚茂樹
- 第9章 道德の特別教科化—その意義と課題— 押谷由夫
- 第10章 道德教育のカリキュラム開発—総合单元的な道德教育— 押谷由夫
- 第11章 道德科の授業デザイン 西野真由美
- 第12章 道德性を育成するソーシャルスキルトレーニング 渡辺弥生
- 第13章 現代的課題に向き合う道德教育 西野真由美
- 第14章 道德科における評価 西野真由美
- 第15章 課題と展望—21世紀を生きる力を育てる道德教育— 西野真由美

これは放送大学大学院文化科学研究科の教科書である。全15章中、10章を西野が執筆している。渡辺は心理学者であるが、西野、押谷、貝塚は道德教育研究の専門家である。第3章において、デュルケムは、ピアジェ、コールバーグと並んで一つの節を割いて論じられている。

以上、いずれの教科書においても、日本の道德教育の歴史、世界の道德教育の歴史、ピアジェ、コールバーグ等の道德性の発達理論、教科教育法、学習指導法などについて論じられている一方、各書のオリジナルなトピックも見られる。また、放送大学の教科書3冊においては、デュルケムがかなり重要視され、厚みのある記述がされているが、他の教科書11冊においては、7冊において言及がみられ、4冊では言及がみられない。もちろん、社会学者が登場せず、教育哲学、教育心理学の視点が強く打ち出されている。デュルケムは『道德教育論』の著者として、学校教育における世俗道德の教育について手厚く論じたはじめての人物である。社会学的な道德分析、道德教育へのアプローチの重要性を説いたはじめての人物である。現代の道德教育においてデュルケムがあげる道德教育の三要素、「規

律の精神」、「社会集団への愛着」、「意志の自律性」の重要性はいささかも衰えない。これらの三要素はいずれも社会学的分析が可能であり、それを必要とするのだ。

もちろん、ソクラテスあるいはカントにさかのぼる教育哲学的アプローチ、ピアジェやコールバーグらの教育心理学的アプローチの重要性を否定するつもりは毛頭ない。しかし、それに社会学的分析を加えることによって、道德教育研究の内容をより豊かにできるのではないかと考える。道德は無人島では存在しない。社会があつてこそ道德があるのである。巨視的アプローチで道德教育をとらえることは、従来の道德教育研究を否定するのではなく、その内容を豊かにすることに貢献するであろう。戦後しばらくはデュルケムは、外部の規律の内面化を説いたように受け止められ、国家主義擁護の道德教育論者のように受け止める議論すらあり、批判されてきた。しかし、デュルケムの『道德教育論』で十分に論じられてこなかったけれども、彼が言及している「意志の自律性」を看過してはいけない。

「意志の自律性」を軸に道德教育を社会学的に分析する視点を、教職課程の「道德教育の研究」に持ち込むことが必要ではないだろうか。

3. 小学校『道德教科書』の分析

次に、教科書検定を通過した実際に全国の小学校で使用されている道德の教科書の分析を行う。理論的背景は、心理学の用語で「非意識のバイアス」を援用する。これは、ある特定の社会集団に対する小さな偏見に由来した固定概念であり、個人が認識できない意識下での判断や意思決定に影響を及ぼす認知とされる。この認知を実証的に証明した研究を2つ紹介する。

Rubin (1992) は、心理学専攻のアメリカの大学生らに、標準的な米国英語で録音した講義を聞かせた。その時に、金髪で青い目の白人女性の写真と、黒髪の典型的なアジア系女性の写真を見せたときでは、同一の音声であるにも関わらず、学生は、後者の写真の時の方が英語に訛りがあるように聞こえたと報告した。Goldin & Rouse (2000) の調査では、圧倒的に男性の演者が多かった米国のオーケストラの楽団員の公開オーディションで、志願者と審査員との間にスクリーンを設置すると、最終審査まで勝ち残る女性の比率が数倍高くなったと報告した。つまり、これらの実験が証明することは、個人の思い込みや固定概念が、正当な判断を阻害し、さらに、人間はその誤った判断に対して無自覚であることを証明する。これらの「アジア人の英語は訛りがある」や「男性の演者の方が女性よりも優れている」という過去の見聞や経験、世間一般に広く流布する一般的な価値観から自身に内在化した固定概念に由来する小さな偏見は、すべての人間に備わっている認知とされる。

2018年度より小学校で、2019年度より中学校において、教科外の活動とされた道德が正式に教科として制定された。教科化に伴う道德的価値の画一化に対する懸念として、2014年の中央教育審議会の答申では「多様な価値観と誠実に向き合い、道德としての問題を考え続ける姿勢」と記され、道德的価値観の押し付けの教育を否定する。しかしながら、知

識や数式の伝授ではなく、様々な人物が登場し、物語を繰り広げていく人間教育を主とする道徳の教科書にこそ、編集者や出版社も意識しない題材や内容における非意識のバイアスは存在するのではないだろうか。また、考え議論に相応しい題材とはどのような題材であろうか。このような問題の所在により、本稿の目的は、採択率の大きく異なる2つの出版社から発行された小学校及び中学校の教科書を数量的に比較検討し、教科書に潜む非意識のバイアスを表出させることを目的としている。教科書研究の見地からは、副教科とされていた道徳の教科書の研究の歴史は浅く、教科化されるに至って、研究の研鑽が始まったばかりである。加えて、研究方法や分析対象の教科書も論者によって異なり、道徳の教科書研究の研究基盤として確立されているとは言い難い。以下に、近年の道徳教育に関する先行研究を紹介する。

理論的な背景で示すと、松下(2011, p.92)は、道徳教育に対して、「一定の社会や集団が求める人間像という鋳型に人間をはめ込むのが道徳教育とされるかぎりには、その特殊な人間像にとらわれずに道徳的存在に向けて成長していくための足場は確保できない。」と、現行の教科書が示す人間のあるべき姿と、本来の道徳が目指す姿が異なるものと、代表的な教材である「手品師」を元に教科書が追求する人間像を否定する。

話の概要は以下のとおりである。腕は良いが売れない手品師が、ある日道で少年と出会う。その少年がひどく落ち込んでいる様子を心配した手品師は、少年に声を掛け理由を尋ねると、母が帰って来ないと答えた。哀れに思った手品師が手品を見せて少年を励まし、明日も来ることを約束した。その日の夜に、大劇場のステージで手品を披露する手品師を探しているという電話が手品師に掛かってくる。少年との約束か、大劇場のステージかを選択を迫られた手品師は、迷った末に少年との約束を選択するという「約束は守ろう・友情は大切にしよう」というメッセージを題材にした内容である。松下(2011, p.92)は、自身の名誉や栄光ではなく、少年との約束を守った一見すると尊敬されるべき手品師の行為に対して、自己の利益を抑制し、放棄してまで他者を尊重する現行の自己犠牲の道徳観に対して過度な「利他主義」と唱え、「内的な善の利己主義」の追求が正当に評価される重要性を示している。具体的には、自らの努力や精進によって得ることができる栄光や名誉(例えば、サッカー技術の向上や外国語能力の習得)を犠牲にしてまで、他者を尊重する必要があるのかという論点である。言い換えれば、自身の内的な善を大事にしてこそ、他者への思いやりが可能になると示し、利己主義が広がる社会への警鐘として、反利己主義的な思いやりが声高く叫ばれる現状に疑問を呈している。松下(2011, p.52)の目指すところは、自己実現のための機会と能力を奪われた人々が、自らの職業や信条の内的善を各自が拡張し、他者を傷つけない自己愛で満ち溢れた社会であり、自己愛全てが悪とされる一元化を批判する。

教科としての道徳教科書の比較研究としては、古川(2018)と西口・渡邊(2020)が挙げられる。古川は、2社の出版社の政治的思想を編者や執筆者の思想を元に、右派・保守

派（教育出版）と左派・進歩派（光文書院）に分けて、「ナショナル・アイデンティティ（愛国心）」の観点から分析している。ナショナル・アイデンティティの視点とは、小学校1年から6年までの教科書の全教材の中から、1) 日本の歴史、神話、伝統、文化、市民に関する教材、2) 日本人を取り上げた題材の割合を提示した。結果は、一見、左派が支持すべき文化的・市民的ナショナリズムの題材を右派の教育出版が推進し、右派が支持するはずの文化的・民族的ナショナリズムの題材を推進するという思想の「ねじれ」が検出されたと報告した。

西口・渡邊（2020）は、8社の小学校の教科書48冊を1) 資料の総数、2) 出現頻度の高い資料、3) 8社中5社で共通している出典の高い資料、4) 伝記資料にそれぞれ分類した。結果の一部を示すと、全社が共通して出典している題材が以下の6点である。表1に示されるように、自身の行動を示す「節度・節制」「正直・誠実」「規則の尊重」を求められる項目が4点、他者に対する「親切・思いやり」が1点と、自身の行動や欲求を抑制し、他者を尊重する「利他主義」が重要視される事実を証明している。

しかしながら、上記の比較研究では、ナショナリズムの視点でいえば登場人物の国籍の分析、ジェンダーの見地からの男女比はまだ調査されておらず、本研究では、以下の作業仮説を設定する。1) 採用率が同程度の教科書でも、日本人と外国人の登場の割合は大きく異なる。2) 採用率が同程度の、男女の登場人物の割合は大きく異なる。この2つの観点から、占有率が21.3%の東京書籍の『新しい道徳』と、占有率が5.7%の学校図書『かがやけみらい』を分析対象とする。占有率が異なる教科書を比べることにより、意図的に特定の教育的意義を持つ題材を選別した集合体の教科書における国籍の差、男女の差を非意識のバイアスとして表出させることを目的としている。表2は、上記2社の小学校1年から6年までの教科書の総ページ数を示す。

表1 全社に共通する道徳教材とその視点

資料名	項目の視点	配当学年
かぼちゃのつる	節度・節制 (A)	1年生
橋の上のおおかみ	親切・思いやり (B)	1年生
金のおの	正直・誠実 (A)	1年生・2年生
花さき山	生命の尊さ (D)	3年生・4年生
雨のバスていりゅう所で	規則の尊重 (C)	4年生
手品師	正直・誠実 (A)	5年生・6年生

西口・渡邊（2000）を参考に筆者作成

表 3、4、5 は、1 年生から 6 年生の教科書の一つの単元に登場した人物の男女比及び、国籍比を示したものである。登場人物とは、人物以外にも擬人化できるロボットや動物も対象とした。表 3 は、登場人物について、表 4 は性別について、表 5 は国籍について示している。例えば、表 3 で言えば、東京書籍では、人と動物が同時に登場する単元が 6 つ、学校図書では 8 つ存在し、表 4 で言えば、男性のみ登場する単元が東京書籍では、38、学校図書では、68 存在することを示している。表 3 の登場人物がなしとは、地球的な環境問題や平和などの観念的な単元などである。表 5 の国籍の不明とは、動物の擬人化や、ロボットを示している。

表 2 東京書籍と学校図書の道徳の教科書ページ数

	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	合計
東京書籍	120	140	162	166	178	194	960
学校図書	122	130	142	158	154	154	860

平田 (2018) を参考に筆者作成

下記の表に示されるように、顕著な差として表出したのは、登場人物が男性のみ出現する課と女比のみ出現する課の比率が大きく異なるということである。両出版社共に、女性のみが登場する課が、男性のみ登場する課に比べて、少ないという事実は示されるが、顕著な差として、学校図書の方が、女性のみが登場人物の課が少ないということである。

表 3 東京書籍と学校図書の 1 単元における登場人物について

	東京書籍	学校図書
登場人物:人物のみ	181	207
登場人物:動物のみ	25	18
登場人物:人と動物	6	12
登場人物:なし	3	8
合計	215	245

筆者作成

表 4 東京書籍と学校図書の1単元における登場人物の性別について

	東京書籍	学校図書
性別：男女	128	135
性別：男のみ	38	68
性別：女のみ	22	15
性別：なし・記入なし	27	27
合計	215	245

筆者作成

表 5 東京書籍と学校図書の1単元における登場人物の国籍について

	東京書籍	学校図書
国籍：日本人のみ	173	185
国籍：日本人と外国人	6	10
国籍：外国人のみ	8	25
国籍：不明	28	25
合計	215	245

筆者作成

実存する登場人物を登場させ、偉業や社会的貢献を示すことで、より物語を児童に身近に感じさせ、ロールモデルとなる意図は理解できる。しかしながら、ジェンダー平等や男女の比率という観点では、偉大な人物＝男性という小さな偏見が存在することが指摘できる。また、1単元における登場人物の国籍については、外国人のみが出現する課が、学校図書においては東京書籍の3倍もの数値を示している。この点に関しては、古川（2018）の愛国心の観点から言えば、東京書籍が右派であり、学校図書が左派と判断できる。

結論

結論としては、一見、平等に見える教科書においても、男女比や国籍の比においても教科書間での差異は発見される。教科書を教える上で、最も重要なことは、教科書自体にも、小さな偏見や差別が隠されていることを教員が認識し、隠されたバイアスについて自覚的に実際の授業において是正することが求められるのではないだろうか。それは、評価の観点でも重要な教育的意義を持ち、他の児童との比較による相対評価ではなく、各児童生徒の成長や態度を評価する個人内評価で、記述式とされているからこそ教員の主観性が大きな影響を及ぼすことを示している。つまり、自身の価値観が絶対的な基準ではなく、自身にもバイアスがあるということを加味して評価をしなければならない。

今後の研究としては、全出版社が共通して登場させている話の質的な分析や、実際の小学校や中学校の教員へのインタビューなど、特別の教科となった道徳が、従来の読み物と変わらない、多様な価値観を認識し、理解し合う授業づくりなど包括的な研究を行うことを課題とする。

参考文献

- 麻生ゼミ (1981) 「概論書に見るアメリカ教育社会学の研究動向」『大阪大学教育社会学・教育計画論研究集録』第 2 号、大阪大学人間科学部教育社会学・教育計画論研究、pp.70-147
- 西口啓太・渡邊隆信 (2020) 「小学校における「特別の教科 道徳」の教科書分析—「内容項目」との関連を中心に—」『教育学論集』第 23 号、神戸大学大学院 人間発達環境学研究科・神戸大学発達科学部教育科学論コース、pp.1-9、神戸大学
- 古川雄嗣 (2018) 「小学校道徳教科書における「愛国心」の取り扱いについて—教育出版と光文書院を事例として—」『北海道教育大学紀要 (教育科学編)』第 68 巻第 2 号、北海道教育大学、pp.47-57
- 松下良平 (2011) 『道徳教育はホントに道徳的か—「生きづらさ」の背景を探る—』日本図書センター

註

本稿では、1 節と 2 節を山内が、3 節と結論を末澤が執筆した。本稿の作成にあたっての貢献度は末澤が 60%、山内が 40%である。しかし、本稿全体にわたって両名が責任を負う。